伊勢内宮遷宮杵築祭歌謡の形成

藤原享和

一、はじめに

伊勢神宮の式年遷宮にあたっては、御用材の伐採と搬出の安全を祈る「山口祭」から遷御後の「御神楽」に至るまで極めて多くの祭儀が行われる。その祭儀の一つが「杵築祭」である。

「杵築祭」は現在「新殿の竣功を祝い御柱根を固める祭儀①」とされる（平安中期以前の「杵築祭」は性格が異なると考えられる。これについては本稿「五、私見」に述べる。）が、その際大宮司以下が新正殿御床下に進み白杖を以て御柱根を築固める動作とともに歌う歌（以下「杵築祭歌謡」と言う）がある。

本稿では杵築祭歌謡の歌詞の形成について考察する。

二、杵築祭歌謡

文献上遡りうる内宮の杵築祭歌謡の最古の歌詞は、『遷宮例文』に見えるものである。『遷宮例文』は、長暦二（一〇三八）年～嘉元二（一三〇四）年にわたる一五度の遷宮の記録より例証を抽出したものであるが、その中の杵築祭歌謡部分には「已上寛治秘記②」とあるので、歌詞は堀河天皇時、嘉保二（一〇九五）年に斎行された第二二回の遷宮のものと推定できる。『遷宮例文』所載の杵築祭歌謡は以下の通り。（（　）内は藤原の書き下し。）

掛畏幾五十鈴乃宮乃杵築志氏介里杵築志氏介里囡曾栄留郡曾栄留万世万天二天照須大宮地呂如是志筒々仕奉良牟〇宮家本、文庫本、以下有二仕奉良牟四字一万世万天二万世万天二

（掛けまくも畏き五十鈴の宮の杵築してけり杵築してけり囡ぞ

栄ゆる郡ぞ栄ゆる万世までに天照す大宮どころかくしつつ仕へ奉らむ万世までに万世までに）

知波夜不留五十鈴乃宮仁杵築志天国曾栄留郡曾栄留万津世万天爾、万世爾、

（ちはやぶる五十鈴の宮に杵築して国ぞ栄ゆる郡ぞ栄ゆる万世までに万世に）

一方、外宮の杵築祭歌謡は内宮に約三〇〇年下り『康暦二年外宮遷宮記』は長慶天皇（北朝後円融天皇）時、天授六（北朝康暦二）（一三八〇）年斎行の第三六回式年遷宮の記録である。歌詞は以下の通り。（　）内は藤原の書き下し。

度会乃豊受乃宮乃杵築志天宮曾栄留国曾栄留万世万天仁万世万天仁

（度会の豊受の宮の杵築して宮ぞ栄ゆる国ぞ栄ゆる万世までに万世までに）

このように、史料上検証しうる両宮の杵築祭歌謡の歌詞には約三〇〇年の隔たりがある。この年代差は直ちに両宮の杵築祭歌謡形成の年代差を意味するものとは言えないが、両宮の杵築祭歌謡を同時代の記録で対照することが出来ない以上、両宮の杵築祭歌謡の形成を安易に同次元で論ずることは避けるべきであろう。従って本稿では史料上より古くまで遡ることができる内宮の杵築祭歌謡に絞って論究することとする。以下「杵築祭歌謡」と言うときは内宮のそれを指す。

三、先行研究

杵築祭歌謡の成立について論じた研究は少なく、現在までのところ一八世紀後半の中川（荒木田）経雅の説と、二〇世紀終盤の大島信生氏の説が対立しているばかりである。

中川経雅は一七七五年成立の『大神宮儀式解』巻第八に於いて「カシコシヤ、五十鈴ノ宮ニ杵築シテケリ〳〵、国ゾサカユル、郡ゾサカユル、また、天照スオホ宮トコロ〳〵カクシツ、、仕ヘマツランカクシツ、、仕ヘマツランヨロツ代マデニ。按此一首は天平十四年紀正月宴二群臣一歌、并催馬楽新年をうたひ直せしなるべし。③」と論じている。ここに言う「天平十四年紀正月宴二群臣一歌」とは『続日本紀』巻第十四「聖武紀」天平十四（七四二）年正月十六日条の次の記事中の歌（『続日本紀』一番歌）を指す。

天皇、大安殿に御しまして群臣を宴す。酒酣にして五節田儛を奏る。訖りて更に、少年・童女をして踏歌せしむ。また、宴を天下の有位の人、并せて諸司の史生に賜ふ。是に、六位以下の人等、琴鼓きて、歌ひて曰はく、

「新しき年の始に、かくしこそ、供奉らめ、万代までに」とい

ふ。

また、『催馬楽』「新年」は、

新（あらた）しき　年の始めにや　かくしこそ　はれ　かくしこそ　仕へまつらめや　万代までに　あはれ　そこよしや　万代までに④

である。

経雅は右に揚げた二首の歌を「歌ひ直せし」もの、として杵築祭歌謡をとらえているのである。

この説に対して否定的な見解をとられるのが大島信生氏である。大島氏は「古い寿詞に起源があり、推古紀の歌謡や、『万葉集』『続日本紀』の歌の影響も、直接的ではないにせよ受けながら、杵築祭の歌謡は形成されていったのである。それは、特定の歌の『歌い直し』ではなく、我が国の歌の伝統の中から生まれてきた歌謡であると言えよう。⑤」と述べ、経雅の「『続日本紀』歌謡、『催馬楽』の歌い直し」説を批判される。

そして、杵築祭歌謡の起源を「古い寿詞」に求め、それが「推古紀の歌謡や、『万葉集』『続日本紀』の歌の影響も、直接的ではないにせよ受けながら⑥」形成されていったと考えられるのである。

大島氏の言う「古い寿詞」とは「神代記」「神代紀」に見える新室寿ぎの歌（『古事記』一番歌。『日本書紀』一番歌もほぼ同じ）、

八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を

や、「顕宗即位前紀」に見える新室寿ぎの寿詞、

築き立つる　稚室葛根、築き立つる　柱は、此の家長の　御心の鎮なり。取り挙ぐる　棟梁は、此の家長の　御心の林なり。取り置ける　椽橑は、此の家長の　御心の斉なり。取り置ける　萑蘆は、此の家長の　御心の平なり。（割注省略）　取り結へる　縄葛は、此の家長の　御寿の堅なり。取り葺ける　草葉は、此の家長の　御富の余なり。出雲は　新墾、新墾の　十握稲の穂、浅甕に　醸める酒、美にを　飲喫ふるがね、（割注省略）　吾が子等。（割注省略）　脚日木の　此の傍山の、牡鹿の角（割注省略）　挙げて　吾が儛へば、旨酒　餌香の市に　直以ちて買はず。手掌も　柂慘に（割注省略）　拍ち上げ賜へ、吾が常世等。

を指し、

「推古紀の歌謡」とは推古天皇二十年正月七日に蘇我馬子が天皇に奉った寿歌（『日本書紀』一〇二番歌）、

春正月の辛巳の朔にして丁亥に、置酒して群卿に宴す。是の日に、大臣、寿上りて歌して曰さく、

やすみしし　我が大君の　隠ります　天の八十蔭　出で立たす　みそらを見れば　万代に　かくしもがも　千代にもかくしもがも　畏みて　仕へ奉らむ　拝みて　仕へまつらむ　歌づきまつる

とまをす。

『万葉集』の歌とは巻第十七・三九〇七～八番歌、

三香の原の新都を讃むる歌一首（并せて短歌）

山背の　久邇の都は　春されば　花咲きををり　秋されば　もみち葉にほひ　帯ばせる　泉の川の　上つ瀬に　打橋渡し　淀瀬には　浮橋渡し　あり通ひ　仕へ奉らむ　万代までに

（巻第第十七・三九〇七番歌）

反歌

楯並めて　泉の川の　水脈絶えず　仕へ奉らむ　大宮所

（巻第第十七・三九〇八番歌）

『続日本紀』の歌とは中川（荒木田）経雅の説を紹介した部分に掲げた巻第十四「聖武紀」天平十四（七四二）年正月十六日条に見える歌（『続日本紀』一番歌）、をそれぞれ指す。

杵築祭歌謡の成立について論じた主な先行研究は以上であるが、この他にローズマリー・ベルナール氏に次のような意見がある。

「歌詞の文学史が永いし、古典や宮中における歌詞との関りも深いと思われる。古典上に宮造りの際に歌舞（詠儛）を行うという古い風俗が見えるし、それと『新年』という形容語句、或は天皇の御代の永遠性に賀歌を奉献する時の歌詞が、杵築の歌の源であろう。[7]」

また、同氏は『日本書紀』一〇二番歌や『続日本紀』一番歌（何れも前掲）、また『万葉集』巻第十三・三三〇二番歌[8]、同三三二四番歌[9]、『古今和歌集』巻第二十・一〇六九番歌[10]（「大直毘（おほなほび）の歌」）との表現の類似性を指摘し、「天皇御代の永遠性を祝福する表現が、同じく杵築祭の歌にも使われてきたと言えよう。杵築祭の場合は（中略）神宮と国家の永遠性を祈ると理解されよう。[11]」とも述べておられる。

氏の文章はやや文意がとり辛い所もあるが、要するに「天皇の御代を寿ぐ万葉時代以来の古くからの賀歌の表現が杵築祭歌謡にも取り入れられている」という主旨と理解する。

四、先行学説の検討

次に先行学説の検討に入る。

まず、経雅の言う杵築祭歌謡は『続日本紀』一番歌と『催馬楽』「新年」を「歌ひ直せし」ものであるという説についてである。「歌ひ直す」とは厳密にどのような言語活動を指すのかが限定しにくいが、『続日本紀』一番歌と『催馬楽』「新年」の歌詞を「杵築祭」に合うように替えて歌ったのが杵築祭歌謡であるというのであれば、今日的見地から言うとやや粗雑な論と言わざるを得ない。

仮に「歌ひ直せし」ものであるとしても、『続日本紀』一番歌からなのか『催馬楽』「新年」からなのかも明確ではない。勿論杵築

祭歌謡は『続日本紀』一番歌や『催馬楽』「新年」の歌詞と共通の表現を含むが、同様な表現は大島信生氏やローズマリー・ベルナール氏も指摘するように杵築祭歌謡に先行すると思われる他の史料にも見え、『続日本紀』一番歌と『催馬楽』「新年」を「歌ひ直せし」と直線的或いは単線的に考えることには慎重になるべきであろう。更に経雅の論は「……天照す大宮どころ……」についてのみの分析であり、もう一首の歌には何も触れていないという憾みが残る。

次に大島氏の論について。

杵築祭歌謡の起源を「古い寿詞」に求める考え方には疑問がある。大島氏のおっしゃる「古い寿詞」は「先行研究」先に掲げた『古事記』一番歌・『日本書紀』一番歌や「顕宗即位前紀」に見える新室寿ぎの寿詞を指すが、杵築祭歌謡は「新室寿ぎ」とは性格を異にするからである。「新室寿ぎ」は言うまでもなく「新築建物を寿ぐ（祝福する）こと」であって、竣功間もない家屋のすばらしさ、立派さをその家の主人への称讃と絡めて述べ上げるものであるが、「杵築祭」は竣功後の祭りではなく、竣功前の新宮の御柱根を築き固める祭りである。『遷宮例文』によれば御扉を造る「御戸祭」よりもまだ先に行われる祭典[12]であり、竣功を祝う新室寿ぎとは全く場や機能を異にする。歌唱形態も次の史料を見れば新室寿ぎの寿詞とはおよそかけ離れたものであることが理解されよう。（ア、イ、ウとも傍点は藤原による）

ア、『元亨三年内宮遷宮記（假字本）』（元亨三（一三二三）年第三四回式年遷宮）

……　二しゆのうたを心のうちにゑいし、……

イ、『寛正三年造内宮記』（寛正三（一四六二）年第四〇回式年遷宮）

……　二首ノ詠哥ヲ微音ニ謌テ、……

ウ、『寛文九年内宮遷宮記』（寛文九（一六六九）年第四五回式年遷宮）

……　二首謌ヲ微音三反ニ唱廻、……

ア「心のうちにゑいし」、イ「微音ニ謌テ」、ウ「微音三反ニ唱」とあるように、杵築祭歌謡は大きな声で歌うものではなく、心の中で、或いは微音にて詠唱するものなのである。「微音」というのは、『儀式』（『貞観儀式』）巻第一「園并韓ノ神祭儀」に「御巫微声ニ宣ノ祝詞ヲ」と見えるように神に対して申し上げる祝詞の奏上法であり[13]、新室寿ぎの寿詞が新築家屋の主人に対して声に出して唱えられることによってその機能を発揮したであろうのとは根本的に異なる。

ただ前掲ア～ウの史料は時代的に『遷宮例文』所載の杵築祭歌謡（嘉保二（一〇九五）年）を下るので、嘉保二年段階の歌唱形態は如何かということが当然問題となろう。

『遷宮例文』には杵築祭歌謡の発声形態そのものに関する記述はないが、杵築祭歌謡は左のように「詔刀言」（のりとごと）の中に記されており（ここでは杵築祭歌謡の記載形態を明らかにするため、活字版に因らず神宮文庫蔵明治一一（一八七八）年写本を藤原が翻刻して掲げる。改行部分は「／」で明示した。誤字と思われる部分もあえてそのまま記した。杵築祭歌謡部分に傍線を附した。）、この歌が祝詞と同様かまたはそれに近い形態で口にされたことをうかがわせる。祝詞が微音で唱えられる以上、少なくとも杵築祭歌謡部分だけ独立して大声で詠唱されたとは考えにくい。

詔刀言

度會乃宇治乃五十鈴川上乃下都磐根仁大宮柱大／敷立天朝廷寶位
比無動久常磐堅石仁茂世度平久／安久守幸給度以吉日良辰天千五百
秋豊葦原乃瑞大／宮柱乎百千位神人等良奉杵築詔度申掛畏幾五／
十鈴乃宮乃杵築志弐介里杵築志弐介里国曽栄留郡曽栄／留万世万天二天
照須大宮地呂如是志筒々仕奉良牟仕／奉良牟万世万天二万世万天二
知波夜不留五十鈴乃宮仁杵築志天国曾栄留郡曾／営留万津世万天尓万
世尓

已上寛治秘記

「杵築祭」は「新室寿ぎ」ではなくあくまで神事である。新宮の御柱根を築き固めることによって神に「仕へ奉る」ことを申し上げるのが杵築祭歌謡なのである。

大島氏も注⑤、⑥掲示論文の中で『古事記』一番歌や『日本書紀』一番歌に「杵築祭歌謡との歌詞の類似は見られない」、「顕宗即位前紀」の新室寿ぎの寿詞中に杵築祭歌謡と「直接的な類句があるわけではない」と認めておられる[14]。

新室寿ぎと「杵築祭」は先程から述べているように根本的にその性格が異なるものであり、それらに伴う寿詞なり歌謡なりの機能も全く別種のものであるから、表現においても両者に共通点がないのは当然であろう。

五、私見

次に杵築祭歌謡の成立に関する私見を述べる。

まず、歌詞の形成時期について。

「一、杵築祭歌謡」でも述べたとおり杵築祭歌謡歌詞の初見記事は『遷宮例文』所載の嘉保二（一〇九五）年に斎行された第二二回の遷宮のもの（推定）である。ただ、延暦一三（八〇四）年成立の『皇太神宮儀式帳』（「一新宮造奉時行事并用物事」）に、

取二吉日一、正殿地築平……役夫卜合地土正殿地持運置、即禰宜内人等、築平詠儛、……

とあり、ここに「歌詞の内容は分からないものの、『遷宮例文』所

引「寛治秘記」に近い内容の歌詞を想定することは可能であろう。」（大島氏注⑤、⑥掲示論文）とする見解もある。

たしかに『皇太神宮儀式帳』の右の記述から、九世紀初頭段階で「正殿地（オホミヤドコロ）」を「築平（ツキナラス）」祭りがあり、（歌詞の記載はないが）「詠儛（ウタヒマヒ）」という動作が確認できる。しかし、『皇太神宮儀式帳』に見える「築平詠儛」は「役夫（ヤクフ）卜合地（ウラヘタルトコロノ）土正殿地（ツチヲオホミヤドコロニ）持運置（ハコビオキテ）」行われる動作であって、正殿建築前に卜定した土地から土を運び入れて土地を「築平（ツキナラス）」祭りであり、嘉保二年段階のように正殿建築後に御柱根を築き固める祭りとは性格が異なる。[15]『皇太神宮儀式帳』には「杵築祭」という祭りの名称もまだ見えず、嘉保二年段階の「杵築祭」とは性格が異なると見るべきであろう。「杵築祭」と記されるようになってから（前節に記したように）「詔刀言」として、或いは「心のうちに」、「微音」でうたうという歌唱法とともに記されることになる歌が、それより遙か以前の『皇太神宮儀式帳』段階で歌われていたと考えることは難しい。「詔刀言」として、或いは「心のうちに」、「微音」で歌うというのは『皇太神宮儀式帳』の「詠儛」という所作にもなじまない。

更に『延喜式』（延長五（九二七）年完成、康保四（九六七）年施行）巻第四神祇四「伊勢大神宮」の「鎮二祭宮地一」条にも、

築二平正殿地一……右、鎮祭畢、地祭物忌清二掃其地一、掘二心柱穴一、……

と見え、康保四年段階で「築二平正殿地一」は「掘二心柱穴一」の前であることがわかる。この段階でもまだ「杵築祭」の名称は見えず、「築平」は建築後の御柱根を築き固めるのではなく、「宮地を鎮める」祭として行われていたのである。

これらの事実から、『遷宮例文』に見える杵築祭歌謡が成立したのは九六七年（『延喜式』施行）より後、一〇九五年（『遷宮例文』所引『寛治秘記』）までということになる。具体的には天元四（九八一）年の第一六回式年遷宮（円融天皇時）から嘉保二（一〇九五）年の第二二回式年遷宮（堀河天皇時）までである。

次に歌詞の影響関係について。

「三、先行研究」に記したように、杵築祭歌謡には類句を含む多くの先行する歌があることが中川経雅や大島信生氏によって指摘されている。既に掲げた他にも、「如是志筒々仕奉良牟万世万天二（かくしつつ仕へ奉らむ万世までに）」については『万葉集』に、

高御座　天の日継と　天の下　知らしめしける　……　大君の
任けのまにまに　この川の　絶ゆることなく　この山の　いや
継ぎ継ぎに　かくしこそ　仕へ奉らめ　いや遠長に
天地と　久しきまでに　万代に　仕へ奉らむ　黒酒白酒を

（巻第十八・四〇九八番歌）

（巻第十九・四二七五番歌）

と見え、「国曾栄留郡曾栄留（国ぞ栄ゆる郡ぞ栄ゆる）」については、弘仁一三（八二二）年頃成立の『日本国現報善悪霊異記』に、

朝日刺す豊浦の寺の西なるや、おしてや、桜井に、おしてや、おしてや、桜井に、白玉沈くや、吉き玉沈くや、おしてや、おしてや、然しては、国ぞ栄えむ、我家ぞ栄えむや、おしてや。

と見え、『催馬楽』「葛城」にも、

葛城の　寺の前なるや　豊浦の寺の　西なるや　榎の葉井に白壁沈くや　真白壁沈くや　おしとと　とおしとと　しかしてば　国ぞ栄えむや　我家らぞ　富せむや　おおしとと　としとんと　おおしとんと　としとんと

と見える。

それでは、杵築祭歌謡と共通の表現を持つこれらの歌（「三、先行研究」に掲げた歌も含む）が杵築祭歌謡の形成に直接つながったのであろうか。

まず、『日本書紀』や『万葉集』の表現から杵築祭歌謡が直接形成されたとは時代的にも考えにくい。また、『日本書紀』や『万葉集』に見える類似表現は「仕へ奉らむ」「万代までに」のみであり「国ぞ栄ゆる」はないので、表現の上からもやはり直接の因果関係を想定することは難しい。

『続日本紀』には「仕へ奉らむ」「万代までに」「国ぞ栄ゆる（えむ）」が揃うが、これもまた時代的に杵築祭歌謡に対する直接の影響関係は考えにくい。また、『続日本紀』一番歌は宮廷の寿歌であるが同八番歌は光仁天皇即位の童謡（わざうた）であって、歌の性格上も『続日本紀』から直接杵築祭歌謡に転用されたとは考えにくい。しかし、『続日本紀』歌謡（一番歌、八番歌）の表現は後に『日本国現報善悪霊異記』、『古今和歌集』、『琴歌譜』、『催馬楽』に取り入れられ広く流布した。就中『催馬楽』（「葛城」、「新年」）は次の通り『源氏物語』に見え、『體源鈔』にも「哥楽例」が記録されているように平安時代中後期の宮廷社会に広く歌われていたことが確認できる。

『源氏物語』「若紫」

弁の君、扇はかなううち鳴らして、「豊浦の寺の西なるや」とうたふ。

同「若菜下」

葛城遊びたまふ、はなやかにおもしろし。

『體源鈔』十ノ上（豊原統秋撰　永正八・九（一五一一・二）年）

哥楽例

朝覲行幸

―中略―

同四（一一二三）年正月五日
呂新年、鳥破、席田律（略）
―中略―
太治（一一二七）二年正月三日
呂新年、鳥破、席田、賀殿急律（略）
同三（一一二八）年正月二日
呂新年、鳥破、席田、同急律（略）
―中略―
天承元（一一三一）年正月二日
呂新年、鳥破、美作律（略）
―中略―
長承二（一一三三）年正月二日
呂新年、席田、鳥破急、賀殿急律（略）
―中略―
同三（一一七一）年正月十三日
呂新年、鳥破、美作、鳥急律（略）
―中略―
治承二年（一一七八）年正月四日
呂新年、鳥破、席田、鳥急律（略）
―後略―

清暑堂御神楽
―中略―
仁安元（一一六六）年十一月十七日
呂葛城、鳥破、蓑山［イニテ補］、同急
―後略―

（　）内は藤原注

杵築祭歌謡の形成年代を先述の通り九六七年より後、一〇九五年までとすると、時代的にこの『催馬楽』が影響を与えたと考えるのが最も自然であろう。

勿論、文字化されたテキストからの改変による杵築祭歌謡の創出という可能性も否定できないので、「仕へ奉らむ」「万代までに」等の表現が用いられた歌が記載されたテキストの成立年代と杵築祭歌謡の創立年代の差のみを以て杵築祭歌謡との影響関係を論じるのは危険である。しかし、杵築祭歌謡が、当時歌われていた歌謡からではなく文字化されて久しいテキストから創作されたと考えるよりは、杵築祭歌謡成立当時に実際に歌謡として広く歌われていた『催馬楽』の表現を下敷きにして、「杵築祭」の動作に相応しい表現で歌い出されていったと考える方が蓋然性が高い。

『催馬楽』「葛城」は『続日本紀』八番歌とは異なり、童謡（わざうた）としての性格はなく、賀宴や清暑堂御神楽に歌われる寿歌としての機能を

持っているので、その表現が杵築祭歌謡として用いられるのにふさわしかったのである。

神宮祭主、大神宮司の補任は『延喜式』巻第四「伊勢大神宮」に、

大神宮司者、准二国司交替一

以二神祇官五位以上中臣一任二祭主一

と見え、中央からの派遣であることがわかる。中央から神宮に派遣された官人が宮廷に広く行われていた歌謡である『催馬楽』から「杵築祭」にふさわしい歌詞を持つ「新年」、「葛城」を下敷きにして歌い出したと考えるのが妥当であろう。一二世紀の『皇太神宮年中行事』にも次の通り「万代までに」等の表現が見え、杵築祭歌謡と同様の影響関係をうかがわせる。

六月十六日御饌祭桜宮大和舞歌

宮人の　挿せる榊を　我挿して　万代までに　奏で遊ばむ

六月十七日祭使参宮之間大和舞歌

六月の　大装衣　膝つきて　万代までに　奏で遊ばむ

大宮の　千木に生ひたる　山榊　万を千代に　仕へ奉らむ

十二月十七日月次祭直会大和舞歌

宇治山の　五十鈴の原に　満ち立ちて　万代までと　奏で遊ばむ

以上、杵築祭歌謡は中央より派遣された神宮祭主、大神宮司が平安朝中後期に『催馬楽』「新年」「葛城」を下敷きにして「杵築祭」に相応しい形に歌い出したものである可能性を指摘した。

六、結語

本稿で述べた見解を纏めると以下の通り。

①伊勢神宮の遷宮に伴う祭儀である「杵築祭」には新正殿の御柱根を築き固める所作と共に歌う杵築祭歌謡がある。

②杵築祭歌謡の史料上の所見は内宮が一〇九五年（『遷宮例文』引用『寛治秘記』）、外宮が一三八〇年（『康暦二年外宮遷宮記』）のものであり、その形成を同列には論じられないのでここでは内宮に絞って杵築祭歌謡の形成を考える。

③先行研究には『続日本紀』一番歌や『催馬楽』「新年」を歌い直したとする説（中川経雅）と、古い新室寿ぎの寿詞を起源として我が国の歌の伝統の中から生まれてきたとする説（大島信生氏）がある。

④他にも杵築祭歌謡と共通表現を持つ先行する歌があるにも拘わらず『続日本紀』等から杵築祭歌謡は直接的に歌い直されたとし、また二首ある内宮の杵築祭歌謡のうちの一首にしか触れていない経雅の説は賛同しがたい。

「新室寿ぎ」と「杵築祭」は性格が違い、また杵築祭歌謡は微音

で歌われるものなので新室寿ぎの寿詞とは発声形態も異なる。従って杵築祭歌謡の起源に新室寿ぎの寿詞は想定できず、大島氏の説にも全面的には賛同しがたい。

⑤大島氏の説の中の、我が国の歌の伝統の中から杵築祭歌謡が形成されたとする部分は、同意見であるがもう少し具体的に形成過程を明らかにしたい。

⑥九世紀初頭の『皇太神宮儀式帳』や一〇世紀の『延喜式』に見える、正殿の地を築き平らす祭儀（何れの段階も「杵築祭」という名称はまだ見えない）と、一一世紀終盤（『遷宮例文』引用『寛治秘記』）段階の「杵築祭」は祭儀の性格が違う。『遷宮例文』所収の杵築祭歌謡の歌詞は『延喜式』以前の当該祭儀の態様と不整合である。

⑦従って、『遷宮例文』所収の杵築祭歌謡の成立時期は九六七年（『延喜式』施行）より後、一〇九五年（『遷宮例文』所引『寛治秘記』）までということになる。

⑧杵築祭歌謡には『万葉集』・『続日本紀』・『古今和歌集』等に多く類似の表現が見える。しかし、杵築祭歌謡の形成時期と神宮祭主及び大神宮司の補任形態（中央からの派遣）から考えて、杵築祭歌謡は文字化されて久しいテキスト（つまりすでに「歌謡」ではない）から創出されたのではなく、杵築祭歌謡の成立時期に実際に宮廷社会で広く歌われていた『催馬楽』を下敷きとして歌い出されたと考えられる。

注

① 神宮司庁総務部弘報課編『瑞垣』一六六号　一九九四年一月　神宮司庁　八六頁

② 『寛治秘記』は散佚

③ 大神宮叢書『大神宮儀式解』前篇　一九三五年　神宮司庁　三〇八頁

経雅が『大神宮儀式解』で引用している「杵築祭」の記事は『遷宮例文』ではなく、寛正三（一四六二）年の第四〇回式年遷宮の記録である『寛正造内宮記』（『寛正三年造内宮記』）である。歌謡部分については「（『寛正造内宮記』には）今日奉仕の歌も記せり。」―（　）内は藤原注―と記した上で歌詞（本稿本文に掲示）を掲げている。

ここに言う「今日」は『大神宮儀式解』撰録の「今日」ではなく、寛正三年の「今日」の意であろう。

『寛正造内宮記』記載の杵築祭歌謡は、

カシコシヤ五十鈴ノ宮ノ杵築シテケリ〳〵国ソサカユル郡ソサカユル
万代マテニ〳〵
天照スオホ宮トコロ〳〵カクシツ、〳〵仕ヘマツランカクシツ、〳〵
仕ヘマツラン、ヨロツ代マテニ〳〵

であり、経雅の表記と若干のズレがあるが、これは経雅が繰り返しや終末部を省略して記載したためと考えられる。

④ 引用テキストの底本は「鍋島家本」であるが、「天治本」もほぼ同じであることは写真版（小松茂美監修『日本名跡叢刊　第一九回配本　平安　天治本催馬楽抄』一九七八年　二玄社）で確認。

⑤　⑥　大島信生「杵築祭歌謡の研究」（『皇學館大學神道研究所紀要』第十五輯　一九九九年三月　皇學館大學神道研究所　所収）

⑦　ローズマリー・ベルナール「第六十一回神宮式年遷宮諸祭・関係行事解説並記録写真（五）」（『皇學館大學神道研究所紀要』第十輯　一九九四年三月　皇學館大學神道研究所　所収）中「杵築祭」の項

⑧　……　紀伊の国の　室の江の辺に　千年に　障ることなく　万代に　かくしもあらむと　……

⑨　かけまくも　あやに恐し　藤原の　都しみみに　人はしも　満ちてあれども　……　まそ鏡　見れども飽かねば　万代に　かくしもがもと　……

⑩　新しき　年のはじめに　斯くしこそ　千歳を予ねて　愉しきを積め

⑪　ローズマリー・ベルナール　前掲

⑫　現在の「杵築祭」は御戸祭より後に行われるが、なお竣功後の「後鎮祭」には先行する。

⑬　祝詞が微音で読まれることに関して『儀式』以外では次の記述を参考にした。

ア、金子善光『祝詞作文事典』一九九八年　戎光祥出版　一六四頁

「祝詞の奏上法については、平安時代に儀式書や公家の日記に微音で奏すべき旨が記され、神宮以下の古社にも類似の伝承を見る。」

イ、同　一六六頁、（千種宣夫『神道故実の軌跡』私家版より転載）

「神宮の祝詞奏上は古来微音とされてゐる」

ウ、上田正昭監修『秘儀開封春日大社生きている正倉院』　一九九五年角川書店　五一頁　本文は岡本彰夫

「春日大社の式年造替にかかる仮殿（かりでん）遷宮における）遷座祭の祝詞は秘文とされ、宮司は微声で奏上する。その声は人には聞こえず、神様のみがお聞きになる。もちろん他見はいっさい許されない。」（　）内は藤原注。

なお、神宮司庁総務部弘報課によれば、現在も杵築祭歌謡は古例（『寛正三年造内宮記』）どおり「微音」で歌われるとのことである。（二〇〇三年五月一日藤原聞き取り）

⑭　ただ大島氏は同論文で「このような例が、杵築祭歌謡成立の前段階にあることを注意しておく必要があろう」とも述べ、両者に類句がないにもかかわらずあくまでも杵築祭歌謡の起源に新室寿ぎの寿詞を想定される。

⑮　「杵築祭」の時期の異同については以下の諸研究がある。

ア、神宮司庁（『大神宮故事類纂』遷宮部十四　杵築祭御戸祭御形祭御船代祭一　一九一〇年完成）

按スルニ杵築祭ハ古儀御舩代祭ノ前ニ行ハルル祭典ナリ故ニ近例ハ遷御期近ク行ハルルコト……

イ、神宮司庁（『神宮要綱』一九二八年　神宮司庁　一三二頁）

かく帳式（『皇太神宮儀式帳』、『延喜式』を指す……藤原注）には宮地を築き平らす行事にして、御船代祭等に先ち（ママ）行はれしが、後変遷して建築竣成後の祭儀となれり。

ウ、桜井勝之進（一九九二年神道宗教学会学術大会におけるシンポジウム「神宮式年遷宮について」における発言。『神道宗教』第百五十号　一九九三年三月　所収）

今日も祝詞では「宮地を固めることをみそなはせ給へ」というふうな意味の祝詞を奏上しますし、古い祝詞を見ましても、やはり宮地を固めるというふうに申しております。従って柱根を突き固めるのはこれは所作であります。お祭の行事としてはその通りでございますが、儀式帳によるとこれは建物を建てる前に、新しい御敷地そのものを突き固める行事であったわけです。それがいつしか建物ができてから、杵築をするというふうに変わってまいりました。

エ、ローズマリー・ベルナール（前掲）

上代の新宮造替の段階では、宮殿をたてる前に杵築祭は行われていた。従って新宮の御敷地に新しい土を運ぶ必要があったので、『儀式帳』に記されている通り、建物をたてる前に行われていたから元来は御柱の根元を固める祭ではなくて御敷地に運ばれた土を突き固める行事であったと考えられる。

〈引用テキスト〉

『古事記』・『日本書紀』・『日本国現報善悪霊異記』・『催馬楽』・『源氏物語』―小学館「新編日本古典文学全集」、『万葉集』―塙書房「『万葉集』CD-ROM版」、『続日本紀』―岩波書店「新日本古典文学大系」、『皇太神宮儀式帳』―神道大系編纂会「神道大系」、『古今和歌集』・『皇太神宮年中行事』―岩波書店「日本古典文学大系『古代歌謡集』」、『延喜式』―集英社『延喜式　上』、『遷宮例文』・『元亨三年内宮遷宮記（假字本）』・『康暦二年外宮遷宮記』・『寛正三年造内宮記』・『寛文九年内宮遷宮記』』―神宮司庁「神宮遷宮記」、『體源鈔』―「日本古典全集（覆刻日本古典全集）」

引用に際して二行割注は小字一行に、漢字は原則として現在通行の字体に改めた。

本稿をなすに当たり、新書庫建設に伴う休館中にもかかわらず貴重な典籍の拝見を特にご許可いただきました神宮文庫に対して厚く御礼を申し上げます。